

# NUPRI NEWS

Nagano Urban Policy Research Institute

NPO法人  
長野都市経営研究所

Vol.67

2023.APR.

NPO法人 長野都市経営研究所

発行/NPO法人 長野都市経営研究所 〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町1289-1 丸本ビル2F TEL 026-235-7911 FAX 026-235-6166 https://www.nupri.or.jp E-mail: nupri@nupri.or.jp



理事長あいさつ

## NUPRI 全体懇談会

令和5年2月17日

14時30分～

ホテル犀北館にて開催

「柔らかなさ、しなやかさ」を持って  
「動くNUPRI」を前面に

去る2月17日（金）、「NUPRI全体懇談会」が役員・会員あわせ約40名の出席により開催されました。新型コロナウイルスの感染拡大も縮小傾向が見られるなか、前回同様、会場に入る前に検温、アルコール液による消毒を行い、参加者の安全・安心に配慮しました。全体懇談会では、岩野事務局長の司会により進行。理事長のあいさつ

の後、各部会の代表から今年度の中間報告・活動方針について発表が行われました。また、荻原健司・長野市長からの祝電も披露されました。講演会では、須坂市出身で音楽評論家として活躍されている富澤一誠氏の講演を開催。一般の聴講者を含む約160名が話に耳を傾けました。続く懇親会では、和やかな雰囲気の中で、会員同士が親睦を深めました。

### 今回もNUPRI会員が

### 団結する時

#### 市村次夫 理事長

会員の皆様には、日頃からNUPRIの活動にご理解とご協力をいただき誠にありがとうございます。

先頃、新型コロナウイルスの縮小傾向を見て、マスクの着用については3月13日から屋内外を問わず個人の判断に委ねると、政府からお達しが出ました。3年におよぶマスク生活を経て、いよいよ脱マスクが進むのかということですが、それぞれが感染リスクを理解し、慎重に行動していきたいと考えています。

新型コロナウイルスの感染拡大も徐々に小さくなり、長野市においても新規感染者はかなり少なくなりました。これまで自粛や中止を余儀なくされた

NUPRIの活動も新たな動きが出てくると思います。これまで以上に、どんなことにも柔軟に対応できる「柔らかなさ、しなやかさ」を持った発想で、地域全体の活性化に全力で取り組み、「動くNUPRI」としての存在感を高めていきたいと考えています。皆様には、引き続きご助力、ご協力を何卒よろしくお願いいたします。

### 祝電

長野市長 荻原健司様より

NPO法人 長野都市経営研究所の全体懇談会のご開催を心からお喜び申し上げます。関係各位の並々ならぬご尽力に敬意を表しますとともに、ご参加の皆様方のますますのご健勝・ご活躍をお祈りいたします。

# 令和4年度 各部会活動実績と 今後の活動方針案

## ■産学連携部会

産学連携で、

### 「まち」「地域」「人」づくりを

掛谷嘉則 理事

- 1、「まちづくり」「すなわち「地域づくり」は、「人づくり」につながる。
- 2、大学のキャンパスでは学べない理論と実績の場を創出する。
- 3、まちと学生をつなげる仕組みづくりを考える。



以上の3つの視点から学生の若い力と行動力、各企業の知見を活かす取り組みとして、長野県

立大学との連携企画で小布施町へのツアーを企画しました。ですが、新型コロナウイルスの影響で残念ながら実施までには至りませんでした。今後は、再度長野県立大学と打ち合わせをして決めていきたいと考えております。

## ■「ここ」掘れ！長野調査隊

3月に「まちなか散歩」を開催予定

竜野泰一 調査隊長



「ここ掘れ！

長野調査隊」の活動趣旨は、長野市内の隠れた魅力を再発見して、長野地域の

多様な魅力を市民や観光客に発信することにあります。引き続き私たちが暮らしてきて、よく知っているはずの長野地域の隠れた魅力スポットや歴史遺産をもう一度新鮮な視点で調査・探索し、新たな魅力を引き出すとともに、時宜にかなった調査隊活動を行い、長野地域の観光振興の一助としていきたいと考えております。

この3月16日には、老朽化した空き家をリノベーションし、新しい仕事をしている店を見学する催し「まちなか散歩」を考えています。ぜひご参加をお願いいたします。

## ■「花遊歩」牛に引かれて

善光寺参り

大盛況！花遊歩オープニングパレード

鈴木隆治 事務局次長

昨年4月2日（土）に、第10回目とな



る「花遊歩」が3年ぶりに開催されました。牛に引かれて善光寺参り」の故事に倣い、善光寺

御開帳の前日に行われた「日本一の門前町大縁日」のオープニングパレード（長野駅前広場〜中央通り〜セントラルスクエア）において、先頭を牛に引かれた女性陣60名が華やかに表参道を歩きました。諸般の事情により善光寺まではパレードできませんでしたが、ゴール地点のセントラルスクエアでは着物姿の女性陣と萩原長野市長がツーショットで記念撮影を行い、参加者には大変喜んでいただけました。

今年5月4日（木・祝）には、第11回目となる「花遊歩」の開催を予定しております。牛飼いの村山さんから高齢のためには参加できないという申し出がありました。いろいろとご協力をいただいた村山さんのためにも一緒に歩いていただけましたら嬉しい限りです。

## ■中心市街地活性化部会

意見交換を行い、積極的に提言

倉石智典 理事

中心市街地活性化は、NUPRIの基本理念であります。長野市や長野商工会議所、まちづくり長野と定期的な意見交



換を行い、具体策を提言していきたいと思っております。また、中心市街地への移住を考えている学生や就業者が集まる拠点として、空き家の活用を考えるなどの支援もしていきたいと思っております。

中心市街地活性化部会は、昨年の10月より月1回のペースで開いています。も



また、2月には、権堂地区の飲食店を食べ歩

き、飲み歩きするイベント「ごんバル」が開催されました。実に3年ぶりとなる開催で、客足も好調だと聞いております。様々なイベントが復活し、長野市街地の活性化が促進されることを期待しております。

## ■わいがやサロン活動部会

### 通算88回開催



岩野彰 事務局長

わいがやサロンは定期的に行われており、今年度は5回の開催を重ねました。ご好評をいただ

いた企画には、定期的なものもあります。引き続き、「この人の話を聴きたい」「この人を招いてほしい」などのご要望がございましたら、ぜひ部会事務局までご一報をいただきたいと思います。

## ■新産業創出部会

### 農業の産業化を推進

#### 竹内伊吉 部会長

「りんごの木オーナー制度」は23回目を迎え、昨年11月20日には62名の方が参加されて収穫祭が行われました。今回は自然環境の影響により、りんごの木がフ



ラン病にかかってしまい、相当数の木を伐採しました。そのためオーナーの木からではなく、

おんびら農園指定の木からカゴ2つ分を収穫し、お持ち帰りいただきました。また、「三水米」の生産・販売も継続して行われ、好評な売れゆきでした。

## ■スポーツ振興活動部会

### ●AC長野パルセイロ及びレディース

#### チーム支援活動 アグレッシブに、そして優勝へ



鷲澤幸一 副理事長

2022年度のAC長野パルセイロは、J3の8位となりました。シユタルフ悠紀リヒヤル

ト監督を迎え、球際の攻防を制してアグレッシブに攻めるといふ攻撃的なスタイルを全面に出し、14勝10分10敗の成績を残しました。3月5日(日)には、今年度のJ3がいよいよ開幕します。J2昇格を目指して、ぜひ頑張ってくださいと思います。さらに5月13日(土)には、松本山雅FCと直接対決する信州ダービーが開催されます。今年も熱い闘いに

なると思いますので、ぜひスタジアムでの観戦をお楽しみください。

また、レディースチームは、WEリーグ初年度の7位となりました。昨年10月からは、2年目が始まりました。田代久美子監督のもと、「一試合一試合、最善の準備をし、勝利のために全力を尽くす。WRリーグでの躍進にChallenge(挑戦)する。」をスローガンにしています。NUPRIとしても、「スポーツが街を、人を元気にする」というスローガンのもと、AC長野パルセイロの活躍を期待し、応援していきます。

### ●地域野球クラブ

#### 「信越硬式野球クラブ」の応援活動 目指せ！都市対抗野球大会

#### 茂谷浩子 会員

2023年も長野市代表として、都市対抗野球大会出場をチーム最大の目標とします。所属スタッフ、選手26名は長野県内13社の企業に所属し、社会人野球の精神に基づき、仕事と野球の両立を図りながら、「地域に愛され親しまれる市民球団」を目指していきます。さらに、野球を通じた社会貢献活動の一環として「少年野球教室」を開催し、青少年の育成、地域スポーツ文化の発展にも取り組んでいきます。

NUPRIとしても、今までと同様に「信越硬式野球クラブ」を応援していきます。

## ■公開講演会開催事業

### 話題の講師を招へい

#### 鈴木隆治 事務局長

今年度は、令和4年6月17日のNUPRI定時総会と令和5年2月17日の全体懇談会において、「公開講演会」を開きました。基本理念である地域活性化をテーマにした講師や、その時々々の社会情勢等時宜にかなった講師をお呼びしています。毎回、大勢のご参加をいただき、NUPRIの「地域貢献活動」の一つとなっています。



# 音楽でメンが食えるか？

## 「コロナ禍の音楽危機のリアル」

音楽評論家 富澤 一誠氏



全体懇談会に続き、富澤一誠氏の講演会が一般公開で行われました。富澤一誠氏は、自身のプロデューサーイベントとして、毎年、須坂市のメセナホールで「フォーエバーヤング」歌とトーク満載のフォーク・コンサートを開催しています。講演会には、コンサートのファンも含めて約160名の聴講者が参集。評論家として日本の音楽業界の最前線で活躍してきた富澤氏の話は機知に富み、聴衆が感動し、何度もうなづく場面が見られました。約90分の講演を抜粋掲載します。

### CDバブルが崩壊 なぜCDが売れない時代になったのか

今は、CDが売れない時代といわれています。しかし、今から約30年前の1990年代にはメガヒットと呼ばれるCDが何枚も生まれました。なぜ、あれほど売れたのかというと、一つはテレビドラマとのタイアップですね。『東京ラブストーリー』とのタイアップでヒットした小田和正さんの『ラブストーリーは突然に』が254万枚、『101回目のプロポーズ』とのタイアップでは、CHAGE & ASUKAの『SAY YES』が250万枚を売り上げました。もちろん、それだけのヒット曲を生み出すには、仕掛け人といわれるプロデュー

サーの存在があります。いまのように取って付けたようなタイアップではなく、局のプロデューサーとアーティストがお互いに良いものを創ろうという気概で真剣勝負をしていた。だからこそ、うまくいったのです。

当時は、ドラマの主題歌なら何でも当たるといふ風潮がありました。ヒット曲を生むために巨額な制作費も動きました。それだけの制作費を出しても、なぜビジネスとして成功したかというと、お互いにWinWinだったからです。たとえばCMでクライアントが小田和正さんの楽曲を使うとする。スポンサーにとっては、楽曲をタダで作ってくれて、しかも普通なら使えないような人を使えるというメリットがある。一方のレコード会社のメリットは何かというと、テレビCMをバンバン打って

#### 【富澤一誠氏】プロフィール

1951年、須坂市生まれ。70年、長野高校卒業。同年、東大文Ⅲ入学。71年、在学中に音楽雑誌への投稿を機に音楽評論家として活動を開始し、Jポップ専門の評論家として50年のキャリアを持つ。レコード大賞審査員、同アルバム賞委員長、日本作詩大賞審査委員長を歴任し、現在尚美学園大学副学長を務めている。また、「わかり易いキャッチコピーを駆使して音楽を語る音楽評論家」としてラジオ・パーソナリティ、テレビ・コメンテーターとしても活躍中。毎年、須坂メセナホールで開催される「フォーエバーヤング」をプロデュース。『松山千春・さすらいの青春』『さだまさし・終わりなき夢』『俺の井上陽水』『フォーク名曲事典300曲』など著書多数。

くれるから何億円分の宣伝費がタダになる。それで商品もCDも売れるから、スポンサーもレコード会社もともにWinWinなんです。タイアップビジネスは、そういうところから始まりました。

また90年代には、通信カラオケが登場してカラオケがブームになり、10代から20代の若者たちがカラオケを楽しまれるようになりました。それまでは聴くことが目的だっ

たCDが、その曲を歌うためにCDを買う時代になったのです。そうになると、メーカーやアーティストの意識も大きく変わってきます。90年代後半には、小室(哲哉)ブームが起りましたが、あれはカラオケが要因です。彼はカラオケで歌ってもらえるような曲を作ってCDをヒットさせようという逆の発想。『出口志向』で曲を作るという戦略を取ったんです。

では、なぜCDバブルが崩壊したのか。要は、何でもタイアップ、タイアップで、取って付けたようなタイアップになってきちゃった。実はこれが、大きな問題なんです。CDが売れないとぼやいているけれど、一番大きな原因はレコード会社にあるんです。CDバブルの時代は、宣伝マンが足で稼ぐよりもテレビ局に何千万払ったほうが安かった。だからタイアップにばかり頼って、アイデアをひねりだし、足で稼ぐというプロデューサータイプの宣伝マンが育たなくなりました。今でも宣伝といえどタイアップ頼みで、それ以外のアイデアや発想が出てこない。これじゃ売れるものだって売れません。クリエイティブな発想で楽曲を制作するという人材の枯渇が、レコード会社の足腰を弱めることになったと考えられています。



## エルダー世代を対象にした成熟した大人の音楽「Age Free Music」

かつてレコードやCDの主要な購買層だった世代も年を重ねています。そんな50代から70代の人々の間で、一時期コンピレーション・アルバムが爆売れました。そこで私が提唱してきたのが、エルダー世代をターゲットにした「Age Free Music」大人の音楽」という考え方です。「千の風になって」「吾亦紅」「また君に恋している」などの大ヒットは、大人の購買層が確実に存在している証明になりました。しかも、これらの曲をよく聴いてみると、歌謡曲や演歌、Jポップのカテゴリーには属さない新しいジャンルの楽曲です。これを私は、「Age Free Music」大人の音楽」と定義しました。たとえば森山良子さんや高橋真梨子さん、谷村新司さん、さだまさしさん。彼らの楽曲を歌謡曲などのカテゴリーにはめるのはどこかしっくりこない。彼らが創り出す成熟した世界こそ、まさに大人の音楽と呼ぶにふさわしいものです。

かつてのように国民的なヒット曲が生まれる可能性は、ますます低くなっています。それでも希望はあると私は思っています。「Age Free Music」大人の音楽」のコンセプトにも関係してくるのですが、「時代のマニフェストソング」を作ることです。低迷しているといえながらも、「千の風になって」や「吾亦紅」がなぜ今でも歌い継がれているのか。これらの曲は、基本的に家族愛の歌なんですね。今の日本は家族の絆に関して、とても危うい状態になっている。だからこそ、家族を歌った曲が必要だし、時代が「家族愛」を求めている。それなら、このテーマで歌を作るべきだと思います。時代の要請に応えた曲なら、タイアップは必要ない。歌の力で勝負できるはず。ただし、そういった曲を作るに

は、本当の意味でプロデューサー的な発想を持った人でないと難しい。そういうプロデューサーが先頭に立ってアーティストを発掘し、命がけで曲を作るという覚悟がなければヒット曲は生まれません。

初めて尾崎豊さんの曲を聴いた時の衝撃は、今でも忘れられません。『十七歳の地図』というアルバムでデビューした時、彼はまだ17歳の高校生でしたが、曲を聴いた瞬間、これは面白いと思いました。尾崎豊さんは、70年代に私たちが吉田拓郎さんから受けたような衝撃を同世代の若者たちに与えるかもしれないと直感したんです。当時の雑誌に、「尾崎豊を知らない若者は不幸だ」と書きまわりましたよ。ここで重要なのは、尾崎豊という新人が、たまたま偶然に出てきたわけではないということです。CBSソニーのプロデューサーだった須藤晃さんが彼の才能を見抜き、本人とデイスカッションを繰り返しながらリードしていったのです。

当時、辣腕プロデューサーといわれた人には、驚くべき「目利き」が多かった。あらゆる方面にリーダーを張り巡らせ、それに引っかけたアーティストを確実にものにしていきました。その中からヒット曲が生まれ、時代を超えて歌い継がれ、やがてスタンダードになるわけです。米津玄師さんだってあいみょんさんだって、偶然ポツと出て、いきなり大化けしたわけではないんです。今でも本物の、目利きのプロデューサーはいるんです。

## その曲にふさわしい歌い手によって、いい歌になる

私は、「いい曲イコールいい歌ではない」と思っています。いい曲は、その曲にふさわしい歌い手に歌われて初めていい歌となって、たくさんの人々の心を掴むのです。

新井満さんが作った「千の風になって」は、幼なじみ

の友人の奥さんが亡くなり、その一周忌に用意された鎮魂歌でした。一周忌に参列できなかった満さんが、友人を慰めるために有名な英語の詩に曲をつけた。それをスタジオでレコーディングして、30枚だけ焼いて友人に贈ったそうです。その話を満さんが朝日新聞の記者に話したところ、「天声人語」の記事に載った。これが読者の反響を呼んで、新聞社には、「歌詞を知りたい」、「歌を聴きたい」と電話がひっきりなしにかかってきました。そこで新井満バージョンの「千の風になつて」が2003年にリリースされました。

ところが、話はこれだけで終わらなかったのです。曲があまりに素晴らしいということで、テノール歌手の新垣勉さんや加藤登紀子さん、森山良子さんといった大御所がカバーしました。秋山雅史さんも、その一人でした。2006年にシングルを出して、その年に紅白歌合戦に出場。翌年1月には、オリコン・チャートで1位をとりました。あとは勢いに乗って、1年3カ月後にミリオンセラーを達成するわけです。

この一連のストーリーから何がいえるかというと、もしCDが新井満バージョンだけだったら、「千の風になつて」は、いい歌だけで終わっていた。ミリオンまでは届かなかったと思います。「いい曲は、その曲にふさわしい歌い手に歌われることで、いい歌になる」ということです。その意味で、私はいつも「いい曲」と「いい歌」は違うと言っています。私の言う「ほんもののヒット曲」は、「いい曲」ではなく、「いい歌」なんです。「いい曲」には、永遠の命があります。それをヒットにつなげるには、その曲にふさわしい歌い手を見つけること。さらに時代を読んでタイミングをはかることも重要だと思えます。よく「ヒット曲は生み出すものではなく、偶然生まれるものだ」なんて言われますけど、実はそうじゃないんです。それ以上に人間の意志の力が強く作用していると思うのです。意志の力とは、「この曲を絶対に歌いたい」

という歌い手の情熱です。この曲は、絶対いい歌になるという「目利き」のインスピレーションのことです。

## 音楽業界も同じ ピンチの今こそチャンス!

私が教えている尚美学園大学には、音楽関係の仕事に就きたいという若者たちが入学してきます。何をやりたのか聞いても、「なんとなく音楽業界でやりたいんです」っていう人が多いですね。

音楽でメシを食っていくにはどんな方法があるかという、ひとつは自分がスターになること。それから表を支える裏の仕事があります。これは、作詞・作曲家、アレンジャー、プロデューサーといった人々。それからもうひとつは、本当の裏の仕事です。たとえば音楽プロダクション、レコード会社、プロモーター、ライブの制作会社などです。

大学では、アーティストを養成するコースもあります。が、やはり決め手になるのは本人の才能です。知識やテクニックは教えられても才能だけは伝授できない。だから、アーティストを志す人は、まず自分を知るところが大事です。私も東京に出てきた時は、歌手を目指していました。歌謡教室に通って歌のレッスンを受けたけれど、先生から歌手はあきらめたほうがいいと言われてました。大変な挫折を味わいましたが、その頃に吉田拓郎さんや泉谷しげるさんの歌を聴いて、「次世代を担う歌い手になるかも」と直感し、「この人たちは、すごい！」と言える立場になろうと音楽雑誌に投稿を始め、それがきっかけになって評論家として独立しました。

誰でも目指す場所はある。でも、ある時期にきたら、自分を見切ることも大切です。そして、自分の武器は何なのか、どんな世界が適しているのかを見つけること。そういう条件を満たしていけば、音楽業界で食えると思っ

っています。

2020年に政府から初めてイベントの自粛要請が出され、ライブ産業は壊滅的な状況に追い込まれました。そんな中でも、星野源さんや佐野元春さんは、動画配信を利用して、自宅待機をしている人々を励ましたり、コロナ禍で疲れた人々を鼓舞する歌を発表したりしました。その意味で、今は音楽の底力を日本中にアピールする絶好のチャンスだと考えています。ピンチは、チャンスです。「そもそも音楽は必要なのか？」という原点に立ち戻って、我々は何をすべきなのか、そうしたことを改めて考えるいい機会だと思っ

